



ロンドンの地下鉄で偶然に出会ったジョー・ストラマー © Herbie Yamaguchi

与えてくれるカメラ 写真には心に希望を灯す力がある

写真家 ハービー・山口氏

●プロフィール ハービー・山口 Herbie Yamaguchi

1950年東京都生まれ。名前は自身が傾倒していたジャズ・フルート奏者のハービー・マンに由来。ロンドンが最もエキセントリックだった70年代を捉えた写真が高く評価され、帰国後は福山雅治、布袋寅泰など国内外のアーティストとコラボ。モノクロームのスナップ・ポートレートというスタイルで多くの作品を発表している。



外装材にTranTixiiのチタンが使われている富士フィルムX-Pro3を試写するハービー・山口氏



僕に勇気を



僕は幼いころ脊椎カリエスという病気を患っていました。一人ぼっちの孤独な生活が続き、夢も希望もありませんでした。でも中学2年生のとき写真部に入り、カメラを手にしてから変わりました。無意識のうちに人とのつながりを求めているのでしょう。人の笑顔や優しさを被写体にして写真を撮り始めました。

大学4年生になり、カメラマン志望であちこち就職活動をしたのですが、結果は散々なものでした。僕は必要とされていないんだと虚しさを抱えながら、1973年に大学時代の友だちとイギリスへ渡りました。半年で帰るつもりだったのですが、結局10年過ごしました。

ロンドンでは一時期、劇団で役者をやっていました。鍛え上げられた肉体を持つ仲間たちに囲まれて、かつて脊椎カリエスを患っていた貧弱な僕が舞台に立ち、喝采を浴びている。そのとき、僕は必要とされているんだという喜びに満ちあふれ、

虚しさは徐々に消えていきました。

ロンドン暮らしの3年目、テムズ川沿いに並ぶ空き倉庫で、現地の若い写真家たちと共同生活を送っていました。隣の倉庫はリハールスタジオとして使われていて、壁越しにパンクロックが鳴り響いていました。「俺たちの写真を撮ってくれよ」とやってくるミュージシャンもいました。

70年代のイギリスは不景気で、将来を見出せない若者たちが多かった。そんな不満や怒りからパンクは生まれましたが、ミュージシャンたちはくすぶっている若者たちを勇気づけるメッセージを伝えようとしていました。

そして、ある日偶然、僕は地下鉄車内でジョー・ストラマーを見かけました。ザ・クラッシュという時代を象徴するパンクロックバンドのボーカル兼ギタリストです。千載一遇のチャンスを逃すまい。写真を撮ってもいいですかと思いついて話しかけました。意外にも彼は微笑み、OKしてくれました。

電車が駅に着き、彼がホームに降りようとした瞬間、振り返って僕に向かって言いました。

「撮りたいものはすべて撮るんだ！それがパンクだ」

自分の人生に妥協するな、自分がやりたいことをやるんだ、自分の心に正直になれ。そんなメッセージが込められていると感じました。僕が写真家を続けていくうえで、その一言が心の支えとなりました。

帰国後は国内外のアーティストとコラボする一方、街の人たちのスナップを撮り続けてきました。でも東日本大震災後にボランティア活動で被災地を訪れたとき、被災者の方々にカメラを向けるのは忍びなかった。だから、おじいちゃん、おばあちゃん、の肩や足をもみながらお話しして、写真を撮らせてもらいました。ガレキのなかでも明日を信じて、希望を胸に抱いて生きる東北の人たちの記録を写真集として出版したのですが、震災から10年経った

今年の3月、ある女性からこんなメールをいただきました。

写真集に当時16歳の高校生だった私が写っていることを知りました。あんな状況でも笑顔でニコリしている私の姿を見て、これから何があっても生きていくという勇気をもらいました。ありがとうございます、と。

いつもカメラは持って歩いていますよ。何せ、僕は人が好きで、撮影のときはその人の一番素敵なところを撮りたいと常に思っていますから。写真には、撮る人と見る人がポジティブな気持ちになれる力が秘められていると信じています。これからも心に希望を灯す写真を撮っていききたい。そのとき僕に撮る勇気を与えてくれるカメラ、体の一部として頼れるカメラ、手に包んで心地良い昂揚感^{こうようかん}が伝わってくるカメラは欠かせない。そんな素晴らしいカメラとのセッションをいつも楽しみにしています。

(談)